

今回、東都絹研 News への寄稿の機会をいただいた際に、文献を用いて歴史を研究する立場から、なにか書けないか、とお話をうかがいました。自分の研究は江戸時代以来の「漢学」の伝統を継承した正統な文献史学などとは到底言えないのですが、ともかくそれについて書いてみます。

以前、モンゴルで発掘を行う海外の考古学者から、「我々の研究は、チームとしての協力、屋外での活動、協働的な研究成果発信がその核心である」とうかがったことがあります。文献史学の研究は、もちろん例外もたくさんありますが、ほぼその正反対といつてよいと思います。つまり、「単独作業、インドア、個人主義的研究発信」という性質が、多くの研究者にあてはまるのではと思います。もちろん、これは協働的と独居的な研究のどちらがよいかわからないのですが、私のように人づきあいが悪い意味で苦手な人間にとっては、後者にある種の安らぎを見出す傾向があることは否めません。

いずれにせよ、研究対象とする資料の性質上、私たちの研究は図書館などで資料調査が主になりますが、文献の残存状況が悪い時代・地域を研究する場合は、状況が異なってきます。例えば、私の同僚である柿沼陽平先生は、中国古代史からその研究を始めましたが、もちろん紀元前の「文献資料」はあまり伝存していません。このため、青銅器・木簡・竹簡といった、いわゆる「出土文字資料」が重要な研究対象となります。毎年膨大な件数の出土事例があるので、常に中国の研究者と協働する必要がありますし、金石文や木簡・竹簡の文は、書体や文法の面で、後世の文献史料とは大きく異なるので、専門的な知識と読解技法が必要となります。また、文字以外でも、青銅器や木簡・竹簡の形状は、銘文などの刻入・書写の前推となる用途や機能を推測するうえで重要です。さらに、柿沼先生の場合は、出土した貨幣も重要な研究対象です(柿沼2011・2018など)。

私の場合、これまで研究してきたのは、12-14世紀、キタイ(契丹)、ジュエン(ジュルチン、女真)、モンゴルの支配下にあった華北(北中国)を対象とした、「中国」に対する非「中国人」統治上の文化的・社会的影響と、征服者と非征服者との間でその双方の文化変容といったテーマでした。歴史上の「中国」(時代によってかなり異なる概念ですが)についての文献史料の残存方には、とくに11世紀以降、かたがはつきりした南北格差があります。伝存する文献の多くは、「江南」を中

心とした南方中国で作成されたものであり、それに比べて華北の文献史料は驚くほど少数です。結果として、数世紀にわたって非中国人の支配下にあった華北の歴史を研究するには、文献以外の史料を探してこなければなりません。幸いことに、華北には、文献の欠如を補えるくらいたくさんある碑刻(石碑)が現存しているのですが、私は院生の時から、そうした碑刻を見つけて調べるために華北に留学し、その後も毎年現地調査を行ってきました(写真1など)。

その結果、伝統的な「中国社会」像とはかなり異なり、当時の華北では、非中国的な統治構造や文化伝統(主人と部下の血統の間で取り結ばれる「御恩と奉公」的な主従関係など)が広く受容された、いわばもうひとつの「中国社会」が存在し、それが現在の中国における地域的な文化伝統の差異の根源となっていることがわかりました。もし興味があれば、(飯山2011・Iiyama 2023)を読んでみてください(写真2)。特に、近著では、13世紀前半、モンゴルの支配が始まるのとほぼ同時に突然興隆した、碑刻に詳細な家系図を刻む慣習(「先塋碑」と総称されます)について、①それが上記の「御恩と奉公」的な、主従関係の記録・確認という重要な機能を持っていたこと、②主従関係の継承は一世代に一人のみであったため、たとえ同じ墓地に葬られているも、(親族の大規模化を志向する「宗族」という通念とは正反対に)傍系の親族は系図から徹底的に排除されたこと、③モンゴル支配が終わったから、「先塋碑」は親族集団形成の一環として現在まで機能していること、などを論じています。見「伝統的中国文化」の結晶にみえる碑文慣習が、実は非常に非中国的な文化伝統の受容により勃興し、「中国社会」の変動に影響を与えた点が、個人的に興味深いです。ひるがえってみれば、シルクロードなどを通じて歴史的「中国」に流入した様々な文化伝統は、それそのものとして受容されたとは限らず、我々が現在「中国文化」の範疇で理解している事物も、実は「中国文化」によって表象されるなにか異質なものである可能性は、都城研究などで顕著にみられると思います。

以上、要するに、文献史学の研究者も、必要に応じてフィールドワークをすることが「その方法論をまとめたものとして、太田2021」などがあります。当然ながら考古学者とはその研究の出発点に違いがあるでしょう。もちろんこれは、考古学者が文献史料を参照しないという意味ではなく、周知の通り、考

古学者は文献史料を必ず扱いますが。私の研究に関連する分野(墓葬や碑刻)における専ら(河北省文物局2007・北京市文物研究所2010・林2013・劉2016)など、個別具体的な事例とその関連文化の分析にもとづきつつ、同時代の墓葬の全体的な傾向やその歴史上の位置づけを論じる研究が多く出版されていて、文献史学研究に多大な影響を与えています。また、都城や陵墓についての研究成果はさらに多数に上りますが、全体的にみて、こうした華北あるいはモンゴル高原を対象とした発掘報告や研究の数量は、文献の伝存状況とは正反対に、南方中国よりも多いように思われ、考古学上の研究成果の参照は、華北を対象とする文献史学にとって必須であり、研究上の最大の優位点ともいえます。こうした中、上記の「研究の出発点の違い」は、文献史学者が留意すべき、自らの立場とも言い換えることができます。

5年前、碑刻にも興味深い中国の考古学者と、山西省で一緒に調査をしたことがあります。私は、碑刻の形状や、碑文の書体や言語選択などは一応考察するのですが、墓地(墓葬)の中でその位置づけや、大きな時代の流れの中でのその変遷などについては、そもそも分析に着手するための知識すらなく、言ってみれば、墓葬の中で碑刻しか考察できません。このため、調査の期間中ずっと、墓葬の中で碑刻について質問をしたのですが、辟易したその研究者から、「もう碑刻のことは一言も話さな」と怒られました。墓葬全体を考察する際、とにかく碑文を中心に考える私の質問は非常に文献史的で、とくにそれまで我捜してきていたと思います。思い起こせば以前、早稲田大学史学会大会で、現在は文化構想学部助手をなさっている呉心怡さんが遼金元の墓葬について発表された際にも、同様な質問をしてしまい、これもとて

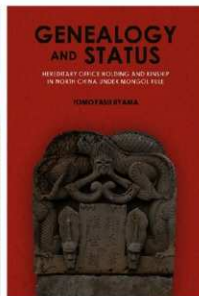


写真1 山西省渾源孫公亮墓の遠景

写真2 執筆者の近著

も反省しています。ただし、考古学上の研究成果は、私がどうあがいてもわからないことに光を当ててものぼかりです。習性となってしまい、これからも煩わしい質問ばかりしてしまうと思いますが、考古学者の方々には、どうか今後ともご指導ご鞭撻のほどをお願いいたします。

### 引用文献(アルファベット順)

- 北京市文物研究所 2010 『魯魯金代呂氏家族墓葬発掘報告』科学出版社
- 河北省文物局 2007 『徐水西黑山—金元時期墓地発掘報告—』文物出版社
- 飯山知保 2011 『金元時代の華北社会と科挙制度』早稲田大学出版会
- Iiyama, T. 2023 *Genealogy and Status: Hereditary Office Holding and Kinship in North China under Mongol Rule*. Cambridge (MA): Harvard University Asia Center.
- 柿沼陽平 2011 『中国古代貨幣経済史研究』汲古書院
- 柿沼陽平 2018 『中国古代貨幣経済の持続と転換』汲古書院
- 林梅村 2013 『大朝春秋—蒙元考古と芸術—』故宮出版社
- 劉未 2016 『遼代墓葬の考古学研究』科学出版社
- 太田 出 2021 『中国農漁村を歩く』京都大学出版会